

髻製作

なり

〔倭訓栞前編三十三〕もとゆひ 寛永の比までは、士庶人の婦女細き麻繩にて髪を束ねて、其上を

黒き絹にて巻きたりといへり、今は捻紙條を用う、こをひねりもとゆひといふ、寛文の頃より也、

〔雍州府志七〕髮捻 今本結モトユヒ元謂髮捻中華所謂髻也、倭俗杉原紙、或奉書紙、又長永紙幅一寸許直

切之、長二三丈捻之、是謂捻髮捻、而後浸水或米泔、而取出之、左右牽張之、以布巾緊急拭之、謂凌シヨク而日

乾、短長隨其所欲而截之、束髮而結之、

〔枕草子八〕むねつぶる、物

もとゆひよる

〔小大君集〕宮の御もとゆひよりてまゐり給ふことは、たゆふどのなんつかうまつり給しを、北の

方うせ給うて、いみはて、の程にめしたるに、つかうまつりおくとなんみ侍おきし、今もと

めて參らんと聞えおき給て、三四日ありて、物の中より侍けるを見たまふるにも、哀なるこ

と多くなどきこえ給へるに、

ほしわぶる袖のなかにや有つらん、これをぞ玉のをにはよらまし

御返し

玉のをを君がためにとよりをきて衣のうらを見ずぞ成にし

〔江家次第二十〕諸家子弟元服

童五位元服略 中本結三筋、長一、短二、

〔連阿不足口傳抄〕一元服次第

打亂宮廣蓋兩説、小本結三筋可入之、

〔皇大神宮儀式帳〕一荒祭宮正殿裝束

髻種類